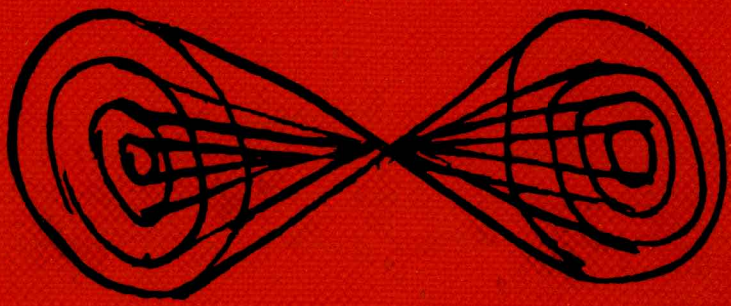

現代劇集

怒りをこめてふりかえれ　地獄のオルフェウス
ヴァージニア・ウルフなんかこわくない　アルト
ウロ・ウイの興隆　カリギュラ　タラーヌ教授
倒れる者すべて　燠火　二人で狂う　牝山羊が島
の犯罪　友情　人間を生きさせたい

青木範夫・鳴海四郎・若淵達治・加藤道夫
安堂信也・渡辺守章・赤沢　寛・里居正美
山室　静訳

世界文學大系

世界文学大系 95

現代劇集

昭和40年5月31日発行

訳者代表　鳴海四郎

発行者　古田晁

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話(291)局7651

目次

怒りをこめてふりかえれ　オズボーン　青木範夫訳　5

地獄のオルフェウス　ウィリアムズ　鳴海四郎訳　56

ヴァージニア・ウルフなんかこわくない　オールビー　鳴海四郎訳　108

アルトウロ・ウイの興隆
——それは抑えることもできる——　ブレヒト　岩淵達治訳　166

カリギュラ　カミュ　加藤道夫訳　209

タラーヌ教授　アダモフ　安堂信也訳　246

倒れる者すべて　ベケット　渡辺守章訳　257

燠火　ベケット　渡辺守章訳　276

二人で狂う　イヨネスコ　安堂信也訳　285
牝山羊が島の犯罪　ウーゴ・ベッティ　赤沢寛訳　298
友情　デ・フィリッポ　里居正美訳　331
人間を生きさせたい　ラーゲルクヴィスト　山室静訳　338
解説　青木範夫・鳴海四郎　岩淵達治・渡辺守章　赤沢寛・山室静　349

装幀　庫田　叕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代劇集

怒りをこめてふりかえれ

オズボーン
青木範夫訳

人

ジミー・ポーター
クリフ・ルイス
アリソン・ポーター
ヘレナ・チャールズ
レッドファーン大佐

時

現代

所

ジミーのアパートの一室

第一幕

〔イングランド中部の大きな町にある、一部屋貸しのアパート。その一室。ジミー・ポーターとアリソンの部屋。日が暮れてまもない頃。四月。

舞台は、大きなヴィクトリア朝風の家の、かなり大きな屋根裏部屋。その屋根は上手から下手へ鋭く傾斜しており、下手舞台ぎわ近くには二つの小さな低い窓がみられる。その窓の手前に黒っぽい色の樫の化粧机がある。大部分の家具は簡素で、やや時代がかっている。下手奥には、ダブルベッドが一つあって、背後にのびている壁の大部分を占領しており、その切れた所に、一つの本棚がある。下手手前寄り、ベッドのこちら側に、がっしりとした整理ダンスがあり、その上には、本やネクタイなど、いろいろなものがちらばっている。ひきさかれたおもちゃのクマと、やわらかいウールで作られたリスもみられる。上手奥はドアであり、その手前に小さな衣裳ダンスがある。上手の壁のほとんどは、大きな楕円形で占められており、その向こう側は踊り場になるのだが、光はさらに向こうにある天窓から、この窓を通してさしこんできている。衣裳ダンスの手前にはガス・ストーヴがあり、その横に、木の食器戸棚がある。その上には小さなポータブルのラジオ。中央観客席寄りに、がっしりとした食卓と三脚の椅子とがあり、これよりさらに客席に寄った所に、二つのみすぼらしい皮張りの深い肘掛椅子が左右に分かれておかれている。

幕が上がると、ジミーとクリフがその左右の二つの肘掛椅子にそれぞれ腰をかけているのだが、二人が拡げている新聞紙のために、観客に見えるのはその足だけである。二人はそれぞれ新聞を読んでおり、あたり一面に新聞紙や週刊誌が山と積まれている。やがて、会話が始まると、二人の姿は観客に見えるわけであるが、ジミーは背の高い、やせた青年で、二十五歳くらい。くたびれたツイードのジャケットとフラノのズボンをはいている。彼はパイプをくゆらしていて、その煙が部屋一面にたちこめている。ジミーという人間は、非常なまじめさと毒舌をたのしむような雰囲気とが、言いかえれば、やさしさと掠奪をほしいままにするような残酷さとが、奇妙にまざりあった男である。すなわち、どこか落ち着かない、強情な、自尊心の強い男で、感受性に富んだ人間をも、鈍感な人間をも、ひとしく遠ざけてしまうような、複雑な性格の持ち主である。鼻につくような正直さ、すなわち、正直をまっこうからおしたてる彼のような男には、あまり友達はできない。多くの人にとっては、ジミーは、感受性が強すぎて、円満な社交性を欠いているように見えるかもしれない。また、別の人々にとっては、口うるさい男にすぎない。彼のように、物事にあまりにも熱中しすぎることは、結果として、何もしないことになってしまう場合が多い。

クリフは、同じくらいの年で、背が低く、色黒く、骨太で、とっくり首のセーターを着ているが、グレイの新しいズボンはしわだらけである。彼は、のんきな、おだやかな男で、ほとんど怠惰に近い。そうして、独学者によくみられるような、どこか緊のある、自然な知性というものを身にそなえて

いる。ジミーが愛を遠ざけてしまう男ならば、クリフはそれを引き出そうとする男に見える。警戒心の強い人間からさえも、愛の表示だけでも求めようとするのである。要するに、クリフはジミーを中和するような、自然な、対称的存在である。上手の、食器戸棚のこちら側に、アリソンが立っている。彼女は、アイロン台にかぶさるようにして仕事をしている。そのかたわらには、洗濯物の山。この三人がかもしだす不協和音において、アリソンの性格がいちばん捉えがたい。彼女だけが、異なった基調音の中で回転しているのである。それは、他の二人の荒々しいオーケストレーションの中におぼれてしまうことが多いような、育ちのよい、弱々しい音である。彼女は、きたない、しかし高価なスカートの上に、さくらんぼ色のシャツをはおっているのだが、そういうなりをしていても、どこか品のよいおもむきがある女である。大ざっぱにいって、彼女は男たちとおない年であるが、彼らの身体的特徴のコントラストがあまりにもきわだっているので、実際よりもはるかに彼女の美しさは、印象的にうつる。アリソンは、背が高く、やせて、髪が黒い。顔立ちは面長で、繊細な感じがし、目もとには人を驚かせるような、内にひそむ強さがみられるうえに、その目は大きく、深いものだから、いやおうなしに、みる人に強烈な印象を与える。部屋は静かで煙草の煙ばかり。唯一の物音は、アリソンがアイロンをときどき台の上におく音。春先によくある、うすら寒い午後のこと。すっかり雲におおわれている。

やがて、ジミーは新聞をなげだす〕

ジミー　まったく、日曜新聞はいやになるねえ！　書評までが先週のと同じみたいじゃないか。本は変われど、書評は変わらずだ。〔クリフに〕そっちのは終わったかい。

クリフ　まだだよ。

ジミー　英国小説のとこを三つほど読んだんだがね、半分はフランス語で書いてあるぜ。日曜新聞を読むと、おまえなんぞは無学が恥ずかしくなるだろう。

クリフ　ジェンジェンだいじょうぶ。

ジミー　それなら、本物だ。百姓だね、おまえは。〔アリソンに〕君はどうだい。君はお違いあそばすんだろ？

アリソン　〔ぼんやりと〕なんですって？

ジミー　新聞を読んでると、ああ私はばかなんだなあと思えてくるだろうと言ったんだよ。

アリソン　ああ……まだ読んでないのよ。

ジミー　そんなこと聞いたんじゃないよ。おれが言ったのはな……。

クリフ　構うのはよせよ。仕事をしているんだから。

ジミー　仕事してたって口はきけるだろう。意見くらいはいえるはずさ。もっとも、責任感が強すぎて[1]、考えるなんていう面倒くさいことはできなくなってしまったんなら話は別ですがね。

アリソン　ごめんなさい。ちゃんと聞いてなかったのよ。

ジミー　それはもうおっしゃるまでもなくわかっていますよ。ポーターじじいが話をすれば、みんな、向こうをむいて、さっさと寝ちまうんだ。奥さまのあくびがその一番手さ。

クリフ　よせったらよせよ、ほんとうに。

ジミー　〔どなる〕結構だよ、アリソン。もとに戻って寝てよろしい。たしかに、おれ一人だよ、しゃべったのは。わかっているだろう？　しゃべったな？　おぼえているな？　はい、どうも、恐れいります。

クリフ　大きな声をだすのはよせ。新聞が読めないじゃないか。

ジミー　なんでそんな苦労をするんだい、どうせひと言もわからないくせに。

クリフ　フン、フン。

ジミー　無知なんだな、おまえは。

クリフ　おまけに、無学な男さ。――さ、もう黙っておくれ。

ジミー　おれの女房に解説してもらったらどうだい？　彼女は学があるぜ。〔アリソンに〕な、そうだろう？

クリフ　〔新聞を読んだまま、彼をけとばし〕構うなって言うのに。

ジミー　もう一度やってみろ、田舎者（いなかもの）！　耳をひきちぎってやるぞ。

〔クリフの新聞をひったくる〕

クリフ　〔からだをのりだして〕ねえ、ジミーさん。私は、今、お勉強しているんでしてね。続けさせてくださいな。厄介小僧さん。お願いだから、返してくださいな。〔手をさしだす〕

アリソン　クリフに返しておやりなさいな。ひどいことをする人ね。

クリフ　そうさ。こっちへよこせよ。アリソン　だってひどいことだと思うって言ってるぜ。

ジミー　思うんだって！〔新聞を投げ返しながら〕へえー、この女、何年も思ったことなんてないんだぜ。そうだろう？

アリソン　そうよ。

ジミー　〔週刊誌をとりあげて〕腹がへってきたな。

アリソン　あら、まだ駄目よ。

クリフ　豚だね、まるで。

ジミー　豚じゃないさ。食物を愛するだけさ。

クリフ　愛するだけ！　なるほど、おまえは色気違いなんだな。ただ……おまえはその対象が女でなくて食い物なんだ。なあ、坊や、今におまえは「赤新聞[2]」にのっかるよ。「ジェイムズ・ポーター。二十五歳。酒をのんでの帰り道、小さなキャベツ一個と二個の豆罐を盗んだ容疑に対し、事実を認め、先週、留置された。被告は、しばらく前から気分が悪く、心神喪失状態にあって目の前がまっくらだったと言っている。被告は、対空二等警備員としての優秀な成績を考慮にいれてほしいと望んでいる」

ジミー　〔苦笑して〕わかったよ。よくわかったよ。おれは食うのが好きで、生きるのも好きなのさ。いけませんかね？

クリフ　いくら食っても、おまえにはムダだよ。太る見こみはまずないんだから。

ジミー　おれみたいな人間は太らないのさ。何度いったらわかるんだ。皆、からだの中で燃やしちまうんだよ。――さあ、読んでいる間は黙っていてくれ。ついでに、お茶をいれておくれ。

クリフ　また飲むのかい？　さっきヤカンに一杯飲んだところじゃないか。おれなんかコップ一杯しか飲まないのに。

ジミー　うるさい！　お茶をいれろ！

クリフ　〔アリソンに〕そうだったろう？　おれは一杯しか飲まなかったね？

アリソン　〔顔をあげずに〕そうよ。

クリフ　それみろ！　アリソンだって一杯しか飲まなかったんだぜ。おれはちゃんとみていたんだ。おまえだけだよ、馬みたいに飲んだのは。

ジミー　〔週刊誌を読みながら〕ヤカンをかけてくれ。

クリフ　自分でかけてこい。おれの新聞をくしゃくしゃにしやがって。

ジミー　この家じゃ、おれ一人だよ、新聞の扱い方を知っているのは。〔別の新聞をとりあげて〕ここにのっている女は、ボーイフレンドにすべてを許してしまうと、自分を大事にしてくれなくなるのではないかって聞いてきている。ばかな女がいるものさ。

クリフ　そういう女はおれに任しといてくれ。

ジミー　どいつがこんな新聞をとっているんだい。〔新聞を投げ出す〕そっちのキザ新聞はすんだかい？

クリフ　どれのことだ。

ジミー　日曜にキザ新聞といやあ、二つっきゃないよ。――おまえが読んでいるやつとこいつとさ。おい、そっちを貸してくれ、こいつを渡すから。

クリフ　ああいいよ。

〔交換する〕

クリフ　ブロムリー僧正の書いたのを読んでいたんだがね。〔片手をアリソンのほうへ差し出し〕だいじょうぶかい？

アリソン　だいじょうぶよ。

クリフ　〔彼女の手をつかみながら〕そんなのほったらかしといて、少しお休みよ。疲れたような顔をしてるよ。

アリソン　〔笑いながら〕もう少しよ。

クリフ　〔彼女の手にキッスをし、その指を口の中に入れる〕この人はきれいだね。え、おい？

ジミー　皆さんそうおっしゃるね。

〔二人、目をあわせる〕

クリフ　君の前足は、かわいくって、おいしいね。〔しゃぶるようにして〕噛み切っちゃおうかな。

アリソン　冗談じゃないわ。シャツが焦げるじゃないの。

ジミー　お指を返しておやり。そんなばかなまねはおよし。――ブロムリー僧正は、なんて言ってるんだい？

クリフ　〔アリソンを放して〕水爆の製造に全キリスト教徒が協力するように、情熱をこめて訴えたらしいよ。

ジミー　そうかい。そいつは、きっと、うけるね。〔アリソンに〕君だって感動するだろう？

アリソン　するでしょうね。

ジミー　たいしたもんだ、おれの女房まで感動するんじゃ。ひとつ、ご趣旨賛同の趣きでも、

僧正閣下にお知らせするかな――まてよ、それから、なんだって……フン、フン、フン……なるほどねえ、閣下は、誰かに、ブルジョアのイヌだと言われたんで、あわてているらしいよ。階級それぞれに特徴はあっても、そこに差はないなんて言っているよ。「こういう観念を、執拗に、悪意をもって育てあげてきたのは――労働階級なのである」――なるほどねえ。

〔二人の反応を見ようとして顔をあげるが、クリフは、依然として、新聞を読んでおり、アリソンはアイロンかけに没頭している〕

ジミー　〔クリフに〕こいつは読んだのかい？

クリフ　う？

〔クリフもアリソンもジミーにかまわないでいる。それをジミーは気がついているが、しかし、そのままにしておくジミーでもない〕

ジミー　〔アリソンに〕君のおやじさんが書いたって言ったって通用するかもしれないぜ。

アリソン　何を？

ジミー　今おれが読んだやつさ。

アリソン　どうしてそういうことになるの。

ジミー　調子が似ているからさ。

アリソン　そうかしら。

ジミー　ブロムリー僧正っていうのはオヤジのペンネームじゃないのかい？

クリフ　ジミーなんか相手にしないほうがいいよ。からむのが趣味なんだから、こいつは。

ジミー　〔早口に〕アールズ・コート[3]のアメリカ福音伝道派のミサに出かけた女のことは読んだかい。そいつはね、神に対する愛だかなんだかを宣言しようとして前へ進んだのさ。ところが、そういう改宗者どもが、やっぱり同じようにひしめきあったものだから、とうとう、肋骨を四本折り、頭を蹴とばされちまったそうだ。彼女は気が変になるほど叫んだらしいが、五万人の参会者は、「キリストのために前進せよ」ってなわけで、誰も気がつかない。

〔反応を知ろうとして、すばやく顔をあげるが、二人とも知らん顔をしている〕

ジミー　おれは、ときどき、自分がどうかしてるんじゃないかと思うことがあるね。――お茶はどうしたんだい。

クリフ　〔新聞をよみながら〕どのお茶だい？

ジミー　ヤカンをかけろよ。

〔アリソン、顔をあげて、ジミーをみる〕

アリソン　まだ飲むの。

ジミー　どうかね。いらないだろうね。

アリソン　あなたは、クリフ？

ジミー　あいつもいらないよ。――いつまでそんなことをしているんだよ。

アリソン　もうすぐよ。

ジミー　日曜はいやだな、まったく。いつもいつも同じことで、気がめいっちまう。少しも変化がないじゃないか。同じ儀式のくりかえし。――新聞を読み、お茶を飲み、アイロンをかけ……もう二、三時間たてば、また一週間がすぎさったことになる。そうして、おれたちの若さもすぎさっていくわけだ。おまえ、知っているのかい？

クリフ　〔新聞をなげだして〕なんだって？

ジミー　〔ごく軽く〕なんでもないさ。いやなやつだよ、二人とも。どいつもこいつもいやなやつだよ、まったく。

クリフ　映画へ行かないか。〔アリソンに〕どう？

アリソン　あたしは行けないけど、ジミーは行きたいんじゃないかしら。〔ジミーに〕そうでしょ？

ジミー　そうして、最前列に陣取っているミーハーどもに、せっかくの日曜を台なしにされたがっているって言いたいんだろう。ま、おれはごめんこうむるよ。〔少し間〕今週のブリーストリーは読んだかい？　ああ、なんだってこんなばかなことを聞くんだい、おれは。おまえなんか読みっこないのはわかってるくせに。毎週こんなものに九ペンス払うなんて、考えてみりゃばかげているよ。読むのはおれ一人なんだし、考えこむのもおれ一人。のんびりした眠りから目覚めるわけでもなし……おまえたち二人でおれをどうかしちゃおうとしているのはよくわかるんだ。頭をおかしくさせてやろうとしているんだよ、おまえたちは。あーあ、少しでもいいから、まともに、人間らしく、なにかに夢中になってみたいもんだ。夢中になれさえすりゃ……あたたかい、ふるえるような声が、「ハレルヤ」って叫ぶのを聞いてみたい。〔芝居じみたやり方で胸を一つたたき〕おお、ハレルヤ！　おれは生きて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るんだ！……いいことがある。ゲームをしようや。「人間ごっこ」っていうやつをさ。ほんとうに生きているまねをするのさ。ちょっとでいいのさ。どうだい？「人間ごっこ」は？〔一人ずつ見渡す〕あーあ、最近は、何かに夢中になっている人間に会ったことがないなあ。

クリフ　やつがなんだって？

ジミー　〔アリソンに構っているのをはぐらかされたので、怒って〕誰がなんだって？

クリフ　プリーストリーさ。

ジミー　お定り文句のくりかえしさ。あいつはアリソンのおやじに似ているね。居ごこちがよくって、特権もなくなってしまった荒野にたって、エドワード王朝の黄昏を、栄養のいい目でふりかえっているようなところがさ。おまえ、そのズボン、どうしちゃったんだい。

クリフ　どうしたって？

ジミー　先週買ったやつだろう、それ。〔アリソンに〕見てみろよ。新しいズボンがああだ、あいつにかかっちゃ。

アリソン　しようのない人ね、ほんとうに。ひどいことをするのね。

ジミー　高い金をだして新しいズボンを買って、それをはいたまま寝そべるから、そういうことになるのさ。まるで土人だよ、おまえは。これで、今はとにかく、こうやっておれが面倒をみてやってるからいいようなものの、おれがいなくなったらどうするつもりだい。え、どうするつもりだよ、クリフ。返事をしてごらん。

クリフ　〔苦笑して〕さあ、どうしますかね。〔アリソンに〕どうしましょう。

アリソン　脱いだほうがいいわ。

ジミー　そうだ、そうだ。脱いだほうがいい。ケツを、いっちょ、蹴とばしてやるから。

アリソン　今のうちなら、プレスをしてあげるわ。

クリフ　よしきた。〔脱ぎ始める〕ポケットのものを出しておかないとな。〔鍵やマッチやハンカチをとりだす〕

ジミー　マッチをこっちにくれ。

クリフ　またあのパイプをやるのかい。匂いがこの部屋にしみついちゃうぜ。〔アリソンに〕あれはたまらないねえ、アリソン。

〔ジミー、マッチをひったくって、火をつける〕

アリソン　あたしは平気よ。なれちゃったわ。

ジミー　なれる天才だよ、この女は。死んでその世へいっても、ものの五分とたたないうちにすぐになれちゃう女だよ。

クリフ　〔ズボンを渡し〕悪いね。――煙草はない？

ジミー　よせ、よせ。そいつにやるな。

クリフ　あんなパイプをふかされてたまるものか。こっちだって喫まなきゃいられないよ。

ジミー　医者がいけないと言ったろう？

クリフ　医者なんかくそくらえだ。

ジミー　それなら結構。大いにやりたまえ。潰瘍のもとなんだから、大いにやってハライタでもおこしたらいいだろう。あーあ、いやだ、いやだ。人の世話なんぞまっぴらだよ。第一、意味もなんにもありゃしない。

〔アリソン、クリフに煙草をわたす。二人、ともに火をつける。アリソンは、また、アイロンかけに戻る〕

ジミー　どいつもこいつも刹那的で、なげやりだ。信念もなく、自信もなく、気力もありゃしない。千篇一律の日曜日だ。

〔クリフは、ふたたび腰をおろす。セーターとパンツだけである〕

ジミー　コンサートがあるはずだ。〔ラジオ・タイムズをとる〕おい〔とクリフを足でつっつき〕、お茶をいれろよ。

〔クリフ、ちょっとうなって、また、読み続ける〕

ジミー　それみろ。ヴォーン・ウイリアムズがある。これはちょっとしたもんだぜ。この男の作品は、どこか力強く、どこか素朴で、しかもイギリス的なんだ。どうもおれみたいな人間が国のことを言うと笑われるらしいが――誰かこんなことを言ってたぞ――ええと――イギリス人は、料理をフランスから学び（こいつはお笑いぐさ）、政治をモスクワから学び、道徳はポート・サイドから学ぶ――だいたい、こんなことを言ってたよ。誰だったか……まあいいや、おまえに聞いたって無駄なんだから。おれはね、ちょっといやなんだが、アリソンのおやじが、久しぶりにインドから帰ってきたとき、どんなふうに感じたかわかるような気がするね。エドワード王朝

の時代には、短い軍人生活でも、結構しゃれたものだったからな。自家製のケーキをたべ、クリケットをやり、しゃれた理想に、しゃれた服を着――どの絵をみたって同じさ。夏の真盛り、日なたの長い一日、詩集を小脇にかかえ、バリバリしたリンネルの糊の匂い――ロマンチックだが、インチキでもあるわけさ。だってそうだろう、たまには雨の降る日だってあったはずだからさ。それなのに、おれみたいな人間までが、インチキだと思っても、それをなつかしく思っちゃうんだ。自分の世界がもてないときには、他人の世界が移り去ったのをなつかしむのもまんざら悪くはないからさ。……どうも、おれもセンチになってきたらしい。しかし、はっきり言って、アメリカ的な世界に生きるのはあじ気ないね。――アメリカ人であれば別だろうが。しかし、おれたちの子孫はアメリカ人になっちゃうよ、どっちみち。そう思うだろう？

〔クリフを蹴とばして、どなる〕

ジミー　思うだろうって聞いただろう！

クリフ　ああ、聞いたのかい？

ジミー　チョコナンと椅子にのってるだけが能なのかい？……おまえ、お茶をいれてくれるんじゃなかったのか。

〔クリフ、うなる。ジミー、アリソンのほうを向く〕

ジミー　ウェブスターは、今晩くるのかい。

アリソン　寄るかもしれないわ。でも、ああいう人だから……。

ジミー　ありがたくないね。今夜会う気にはなれないな。

アリソン　でも、あの人だけは話のわかる男だって言ってたんじゃなかった？

ジミー　それは言ったさ。お国は違うが、同じ英語がしゃべれるやつさ。話が通じる。おれはああいうやつは好きだよ。あいつには、ロもあれば、くちばしもあるし、バネもあるし……。

アリソン　夢中になる人。

ジミー　そのとおりだ。あいつがここへ来ると、気分が明るくなるよ。あいつはおれに好意をもってないが、ちょっと、ほかの人間からは得られないものを残していってくれるやつさ。あんな人間には……。

アリソン　マドリン以後会ったことがないと言うんでしょ。

〔アイロンをかけ終わったものをいくつかたたみ、ベッドのほうへもっていく〕

クリフ　〔新聞を読みながら〕誰だい、そのマドリンっていうのは。

アリソン　いやね、クリフ。もう何度も聞いたことがあるじゃないの。ジミーの好きだった人で……あれは、ジミーが十四のときだったかしら、十三のときだったかしら？

ジミー　十八だよ。

アリソン　ずいぶん世話になった人よ。

クリフ　あんまりたくさんいるからわからなくなるよ。ずっと年上の女だっけ。

ジミー　十うえだよ。

クリフ　たいした小僧だね、おまえも。

ジミー　コンサートは何時からだっけな。〔新聞をしらべる〕

クリフ　〔あくびをして〕あーあ、眠いなあ。また、あした、あの菓子屋の店先に立たなきゃいけないのかと思うとユーウツだよ。おまえ一人でやったらいいじゃないか。おれは寝かせておいてくれよ。

ジミー　最初に工場へまわって、仕入れをしなくちゃいけないんだ。だから、店はおまえがやっておくれ。――あと五分だな。

〔アリソン、アイロン台に戻っている。彼女は腕をくみ、煙草をふかし、考えこむような目つきをしている〕

ジミー　おまえたち二人が束になっても、あの女の指先の力にも及ばないよ。

クリフ　誰のことだい？

アリソン　マドリンよ。

ジミー　人間のことでもなんでも、あの女はすごく知りたがった。ただ単に、子供じみた騒騒しい女というんじゃない。目を覚まして、何かを見ているという点があの女のいいところだった。

〔アリソン、クリフのズボンをプレスし始める〕

クリフ　〔新聞を読みながら〕結局、お茶をいれさせられることになるらしいな。

ジミー　〔静かに〕あの女との生活にはスリルがあった。あいつといっしょだと、バスの二階に乗っているときだって、まるでユリシーズと船出するような気分になったもんだ。

クリフ　ウェブスターはあんまりユリシーズに

似ているとは言えないだろうな。あいつは、ロクデナシだし、顔もみっともない男だぜ。

ジミー　ばか！　ウェブスターのことを言ってるんじゃないよ。あいつはあいつなりにいいやつさ。男まさりの女を女性化したような男だね。[5]〔アリソンに〕君の友達で、多少とも見こみがあるのはあいつくらいだな。君がああいうのとつきあっていけるというのは、ちょっと意外だよ。

アリソン　向こうでもそう思っているわ、きっと。

ジミー　〔下手の窓のほうへ立っていき、外をみながら〕あいつには勇気もあるが、感受性もある。ああいうふうに両方持っているというのは珍しいよ。君の友達なんかは片一方だって持ってやしない。

アリソン　〔静かに、しかし、力強く〕お願いだから、ジミー、やめてちょうだい。

〔ジミーは、ふりかえって、アリソンを見る。疲れたように訴える声が、急に彼の気持をそぐが、すぐまた、新しい攻撃のために、気持をとりなおす。彼は、中央へ来て、クリフのうしろに立ち、彼の頭を見おろす〕

ジミー　友達といやあ、ここに、手引きみたいなのがいるぜ。

クリフ　〔口の中で〕うるさいな。おれのズボンにアイロンをかけているんじゃないか。

ジミー　〔考えながら〕あの女を目覚めさせようなんて思ったらまちがうな。どうやってみたって不可能なことさ。おれが突然バタッと倒れて死んだって、この女はこのままだろうよ。

クリフ　それじゃ、ひとつ、この際、バタッと倒れて死んでいただけないかな。

ジミー　アリソンの友達っていうのは――おやじやお袋の友達もそうなんだが――軍人的で、傲慢で、意地が悪いか、さもなければ、寝ぼけたようなやつらばかりさ。アリソンはその中間にいるんだ。

クリフ　おまえ、ラジオを聞いたらいいだろう。第一、そんな所に立っているのはよせよ。うしろでブツブツ言われると、背中がくすぐったくて仕方がないよ。

〔ジミーはクリフの耳をひねりあげる。痛くて、クリフはうなる。ジミーは、その顔をのぞきこんで、ニヤッと笑う〕

クリフ　ばか！　ちぎれちゃうじゃないか！

サディスト！　〔アリソンに〕こいつの顔を、ひとつ、蹴とばしてくれよ。

ジミー　〔二人の間に入って〕アリソンの兄貴に会ったことがあるかい？　ナイジェルというやつさ。背中をシャンと伸ばし、アゴがなくて、陸士を出た珍物さ。一度しか会ったことはないが、あなたのお母さんて根性がまがっていますねと言ったら、出ていけって言いやがったよ。

クリフ　それで、出ていったのかい？

ジミー　いくわけがないだろう。――大きなやつでね、山高帽をかぶって、お上品な、月並みなことばかりしゃべっているのさ。ああいうのも珍しいね。堂々たる月並み――これがわれらのナイジェルさ。あの男は、いつかかならず大臣になる。しかし、心の片隅には、自分や自分たちの階級の連中は、何世代にもわたって、片っぱしから人をだまし、掠奪してきたのだということは、漠然と感じているはずだ。〔舞台奥へ行き、こちらをふりむく〕ナイジェルは、いるんだかいないんだかわからないような人間だという点では、まず一流中の一流さ。もちろん、姿かたちはあるんだよ。それがなくちゃ、政治家として役に立たないし、取り巻き連だって困っちゃう。特にあいまいなのはあいつの知識さ。人生についても、平凡な人間たちについても、モウロウたる知識しか持っていないから、実際、勲章をもらってもいいところだ。「モウロウを称えて」とかなんとか書いてある勲章さ。しかし、いくらモウロウたるあいつだって、良心に責めたてられるというのはあんまりありがたくない。特にあいつは愛国者なんだし、イギリス人なんだから、長年にわたって、自分は同胞をあざむいてきたのかもしれないなんて考えるのはあんまり嬉しくない。そこで、奴さんどうするか。一つしかない――ばかになってしまえば逃げられるのさ。昔と同じようにものを保っておこうとするのなら、貧相な、ちっぽけな頭を使って、思いきった決断にとびこんだりしないことだ。こんにちのような時代には、しっかりした行動が必要さ。それは確かさ。しかし、ナイジェルの出たような学校の教師たちは、人間の性格を作りあげる術を知

っていたのさ。だから、そこで育ったナイジェルはうまくやるよ。心配はいらないさ、かならずうまくやるから。それどころか。人並み以上にやってのけるぜ。

〔静寂。アイロンをおく音だけ。アリソンは、よそを見ないで、仕事をしている。クリフは床を見ている。この瞬間だけ、彼の陽気さは消えている。ジミーは束の間の勝利感に酔っている。彼は自分のしゃれた言葉に対する反応を知りたいのだが、二人のほうを見るだけの気持にはなれない。そこで、落ち着くために、外をみる〕

ジミー　雨だ。こいつはありがたい。この部屋に、今いちばん必要なものさ。

〔ジミーには、望みどおりの反応がさっきから得られていないのだが、しかし、なんとかして、勇気をふるいおこさねばならぬ〕

ジミー　〔会話調で〕まあ、アリソンの家族っていうのはざっとこんなところだね。おまえはアリソンのおやじとお袋は知ってるだろう。あの礼儀作法攻めに負けちゃダメだ。なにしろ、帽子を女中に渡している間にモモを蹴とばしてくるんだからな。ナイジェルとアリソンは……〔ステュアート・ヒッパード[6]のような声で〕ナイジェル・アンド・アリソン。――まあ、こんな感じだね。つまり、おべんちゃらで、のろまで、ピュスィラニマスな兄妹なんだ。

クリフ　おい、もうコンサートは始まっちゃってるよ。つけてやろうか。

ジミー　この単語、このあいだ見つけたのさ。……ろくに意味もしらないで、今まで使っていた言葉の一つさ。

クリフ　なんだい、それは？

ジミー　今言ったじゃないか。ピュスィラニマス。意味を知ってるかい？

〔クリフ、首をふる〕

ジミー　おれも昔は知らなかったよ。最近さ、この無関心の記念碑みたいな女と結婚してから、この単語が、この女にぴったりだということがわかったのさ。性格を形容する修飾語なんてものじゃなくて――名前そのものさ。ピュスィラニマス――こう、デップリしたローマ時代のオバチャマでも想像させるじゃないか。――「ピュスィラニマス夫人は、競技にいかれる途中、ご主人ロクバンメ氏といっしょに当地へみえられました」

〔クリフ、困惑して、不安げに、アリソンのほうをみる〕

ジミー　かわいそうなのは、このロクバンじいさんさ。ハリウッドで映画になれば、つまらない役だから、まあ、貧相なイギリスの俳優でも演じるところだ。そうして、筋書きは本人もご存じない話で、ステレオに驚いていると、映画が終わらないうちに、自分の女房は肉菓子のようなキリスト教徒にさらわれているというわけさ。

〔アリソン、アイロン台にもたれ、目を閉じる〕

ジミー　ピュスィラニマス夫人には、夫君ロクバンメ氏に倍する輝かしい未来が約束されたのです。万歳、ピュスィ！　ひとつ、闘技場へおりていって、ライオンに食われてみようじゃないか。

アリソン　やめてちょうだい。気が狂いそうだわ。

ジミー　じゃ、狂っちゃったらいいじゃないか。そいつも、楽しみなもんだぜ。〔整理ダンスのほうへ歩いていって〕だけど、まださっきの単語の意味を話し終わってなかったな。〔辞書をぬきだす〕アリソンはご存じだから、言う必要はない。むしろ、あの女はおれの発音があまりよくないから、いつか適当なおりがあったら、皆の前で直してやろうと待ちかまえているんだ。……そら、ここにあった。読むよ。――ピュスィラニマス。形容詞。意志のよわい、勇気がない、気が小さい、卑しい、臆病な、内気な。ラテン語で「小さい」の意味であるアニムスが結びついてできた単語。〔辞書をパタンとじて〕これが、わが女房さ。そうじゃありませんか？　皆さま、どうぞ、ピュスィラニマス夫人をご覧ください。〔しゃがれ声をはりあげて〕万歳、ピュスィ！　今度はなんの映画に出るんだい。

〔ジミー、アリソンをみている。彼女が耐えきれなくなるのを待っているのである。たちまち、アリソンの顔がゆがむようにみえ、まるで彼女は首をのけぞらせて叫ぼうとするかのようにみえる。しかし、一瞬のうちにそれは過ぎ去る。彼女は、こういう丹念に繰りかえされる攻撃というものになれているのである。だから、今夜のところは、ジミーの勝利に終わらないようにみえる。アリソ

ンはアイロンを続ける。ジミーはラジオのところへ行ってスイッチをひねる。ヴォーン・ウイリアムズのコンサートは、すでに始まっている。彼は椅子に戻り、深くもたれ、目をとじる〕

アリソン　〔クリフにズボンを渡し〕はい、できたわ。あんまりじょうずじゃないけれども、きょうのところはこれでいいでしょう。

〔クリフ、立ち上がってそのズボンをはく〕

クリフ　結構だよ、とても。

アリソン　少し注意してはかなきゃ駄目よ。あとで、本格的にプレスしてはあげるけれども。

クリフ　ありがとう。まったく、君はやさしいお嬢さんだよ。

〔彼は彼女の腰のまわりに手をまわして、キッスをする。彼女は笑って、彼の鼻をちょっとひっぱる。ジミーは、それを椅子に坐ったまま見ている〕

アリソン　〔クリフに〕煙草をのみましょうよ。

クリフ　結構だな。どこにある？

アリソン　ストーヴの上によ。ジミー、あなたは？

ジミー　いらないね。おれは音楽をきいているんだ。いけないのかい？

クリフ　失礼いたしました、閣下。

〔彼は、煙草をアリソンの口にくわえさせてやり、自分でも一本くわえ、火をつける。クリフは腰をおろして、新聞をとりあげる。アリソンはアイロン台に戻る。クリフは新聞をなげだし、別のを取りあげる。そうして指でそれをめくる〕

ジミー　なんだってガサガサいわせるんだよ。

クリフ　ホイ、失敬。

ジミー　新聞をめくるなんてことは、畜生、簡単なことじゃないか。第一、それはおれの新聞だよ。〔ひったくる〕

クリフ　ケチケチすんなよ。

ジミー　値段は九ペンス。どこの店でも売ってるんだ。さあ、とにかくおれに音楽を聴かせてくれ。

〔間〕

ジミー　〔アリソンに〕まだだいぶかかるのかい？

アリソン　どうして？

ジミー　おまえは気がつかないだろうがね、ラジオのじゃまになるんだよ。

アリソン　ごめんなさい、もうちょっとよ。

〔少し間。アイロンをかける音が音楽とまざる。クリフは、椅子に坐ったまま、たえず動く。ジミーはアリソンを見守っているが、片足が、険悪な不快さを表わすように折り曲げられ始める。やがて、さっと立ち上がって、アリソンの手前を通ってラジオの所へ行き、スイッチを切る〕

アリソン　どうしたの？　聴かないの？

ジミー　おれは音楽が聴きたかったんだよ。

アリソン　だから、なぜ聴かないの？

ジミー　そんな騒々しい音をたてられて聴けるもんか……あっちでもこっちでも。

アリソン　そう、ごめんなさいね。でもね、あなたの音楽のために、皆がじっとしているというわけにもいかないのよ。

ジミー　どうしてだい。

アリソン　聞きわけのない人ね、ほんとうに、あなたって。

ジミー　姉さんヅラはよせ。〔クリフのほうを向いて〕この女はガサツなやつでね、毎晩やることといえばひどいものさ。ひとの顔をふんづけんばかりの勢いでベッドへとび上がってくる。カーテンひとつ引くのでもすごい音をたてる。なんでもかんでもぶちこわしていく、この女独特のやり方さ。ちょうど、軍艦を進水させるときのようなありさまさ。だいたい、おまえ、女ってどんなに騒々しいものか知ってるかい。〔椅子の手前を通って中央上手寄りへ行く〕知らないだろう？　床ひとつ歩くのだって、一歩一歩床を蹴とばしていくんだぜ。お化粧しているときの女を見たことがあるかい？　武器を放り出し、箱だとか、ブラシだとか、口紅だとかを床にボンボン放り出して大騒ぎさ。

〔化粧机をみつめる〕

ジミー　この女が毎晩そういうことをやっているのを見てきたんだがね、ああいうときの女を見りゃ、女ってものは取り澄ました牛殺しだっていうことがわかるぜ。〔皆のほうをふり向いて〕きたならしいアラビア人のじいさんを見たことがあるかい？　指を小羊の脂の塊の中へグサッとつっこんでいる爺がいるだろう？　女ってあれだよ。女に外科医が少ないのは、ほんとうに神のお恵みさ。あの原始的な手ではらわたをつかみ出されてみろ――ピョンとはらわたをひき出す。まるで、パウダーでも箱から出すみたいなもんさ。ポンと、

またもとへ戻す。パフを机の上へ置くみたいな調子さ。

クリフ　〔おもしろがりながらも、しかめ面をして〕もうよせよ。

ジミー　〔舞台奥のほうへ歩いて行きながら〕あら、いけないってなことを言って、はらわたを床の上へおっことして、ばらまいちゃう。ヘヤー・クリップと間違えているのさ。ああいうふうに騒がしくって、ガサツになれるのは、天性、よほど、鈍感にできてるんだね。

〔中央へ来て、テーブルにもたれる〕

ジミー　前におれが借りていた部屋の上に、女の子が二人いてね、一日じゅう、夜も昼もいろんな音を響かせやがるんだ。日常の、ちょっとしたことでも、こっちの神経にいちいちさわるようなまねをする。おれはそいつらに、何度も泣きついてみたし、階段ごしに、精いっぱいの下品なことをわめき散らすようなまねまでしてみた。ところが、あいつらときたら、平気の平左で、相変わらず、便所ひとつ行くのにも、中世の城にでも攻めこむような音をたてやがるんだ。とうとう、こっちのほうで根負けして逃げ出したわけだが、今だって、あの女たちは、やっぱりああいう調子だと思うね。うん、もしかしたら、もう結婚しているかもしれないな。そうして、亭主を気違い病院に放りこんでいるかもしれない。ドアをバタンといわせ、ハイヒールでのし歩き、アイロンと鍋をぶち鳴らし……おお、永遠に燃えさかる女性の騒がしさよ、だ。

〔外で教会の鐘[7]が鳴り始める〕

ジミー　畜生、また始めやがったな。

〔窓のところへとんで行く〕

ジミー　しまっちまえ、そんな鐘なんか。鳴らすのはやめろ。こっちは、ここで頭が変になりかけてるんだ。鐘の音なんか聞きたくないんだ。

アリソン　〔思わず強く〕どなるのやめて、ジミー！〔自分をとり直して〕ドゥルーリーさんが怒ってくるわよ。

ジミー　ドゥルーリーなんぞ知っちゃいないよ。あんな薄ぼけたばばあなんぞに、おれは、なめられたりするもんか。お前たちとは違うよ。だいたい、あいつは古狸だ。あんな高い部屋代を毎週おれからまきあげたりしやがって。第一、あの女は、今、教会だよ。〔窓のほうをさして〕あのベルに乗ってブランコでもしてるよ。

〔クリフ、窓のところへ行き、窓をしめる〕

クリフ　さあ、坊や、オトナにしておいで。おじちゃんが、オンモにつれて行ってあげるからね。皆で、オチャケでも飲むことにしようね。

ジミー　酒をのむところなんかあるもんか。日曜じゃないか、きょうは。忘れたのかい！それに、雨が降っているじゃないか。

クリフ　じゃ、踊りでもやらかすか。

〔ジミーをあちこちと押してまわる。ジミーはそういう冗談をする気分はすでになくなっている〕

クリフ　ここへはよくいらっしゃるの？

ジミー　さかりがついたときだけだ！——もういい、もういい、ばかばかしい。

〔ジミーは逃がれようとする。しかし、クリフは万力のように彼をおさえつける〕

ジミー　はなせ。

クリフ　皆に不愉快な思いをさせてすみませんと言うまでは放さないぞ。——今年はお乳が出っぱる年でしょうか、ひっこむ年でしょうか。

ジミー　きさまの歯のほうを出っぱらせてやるぞ、放さないと。

〔ジミーはもがいて、なんとかクリフから離れようとするが、クリフはどこまでもしがみつく。二人は、テーブルの手前、中央の床に倒れ、格闘する。アリソンはアイロンを続けている。彼女はこういうことになれっこになっているのであるが、それにもかかわらず、ようやくたまらなくなり始めてきている。クリフは、なんとかして、ジミーから離れるが、いつのまにかアイロン台の前に来ている。ジミーは跳びかかり、二人はからみあう〕

アリソン　あぶないわよ、そんなとこじゃ……毎日毎日、まるで動物園みたいに……。

〔ジミーは気違いのようになって、どこまでもからみ、クリフをアイロン台のほうに押しつけ、アリソンにぶつけるようにする。アイロン台は倒れ、クリフは彼女にぶつかり、二人は、床の上に重なって倒れる。アリソンは、苦痛の叫び声を発する。ジミーは、ぼんやりしたように、息を殺して、二人を見おろしている〕

クリフ　〔起き直って〕アリソンがけがをしたぞ。

〔アリソンに〕だいじょうぶ、君？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com